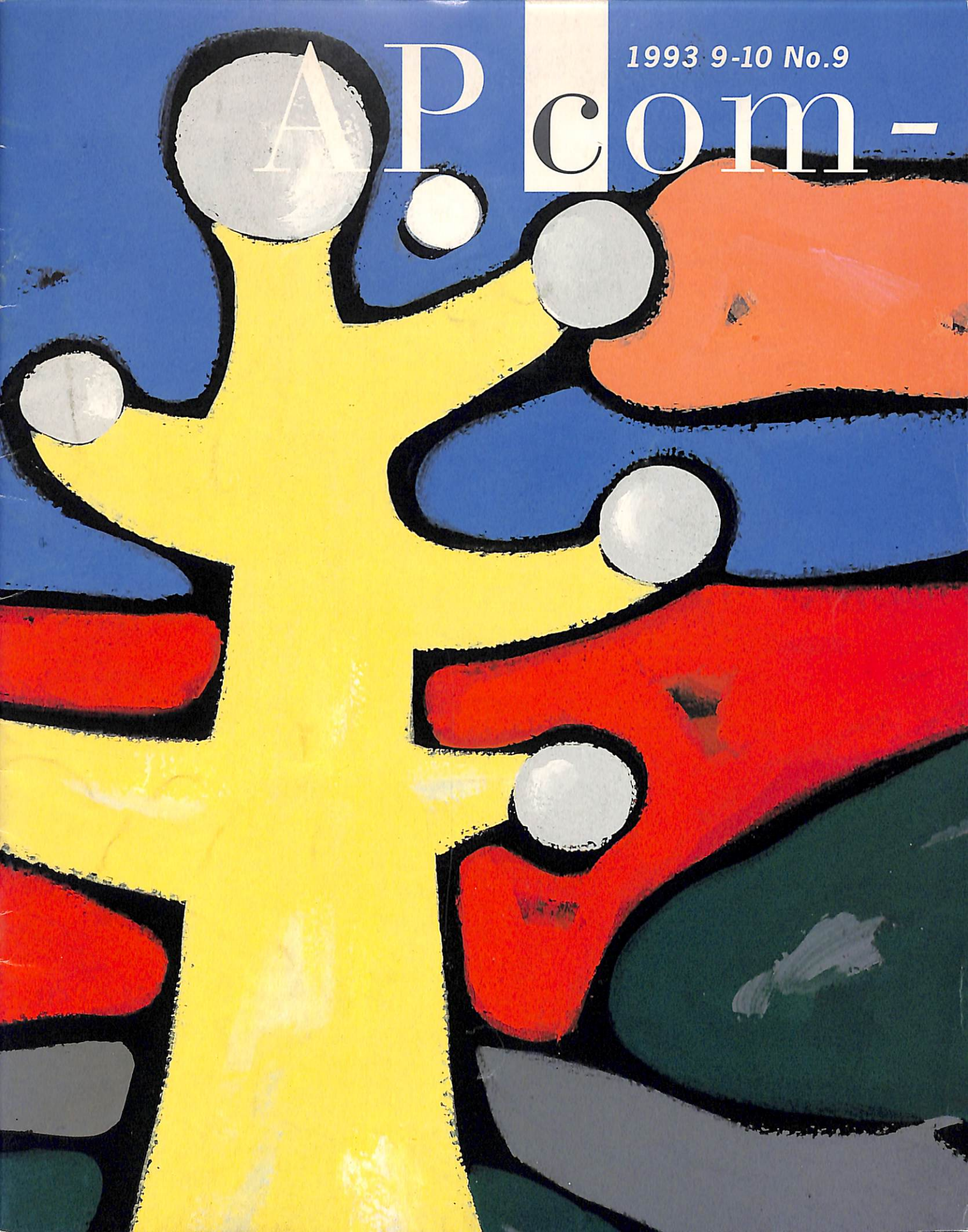
AP com-

1993 9-10 No.9

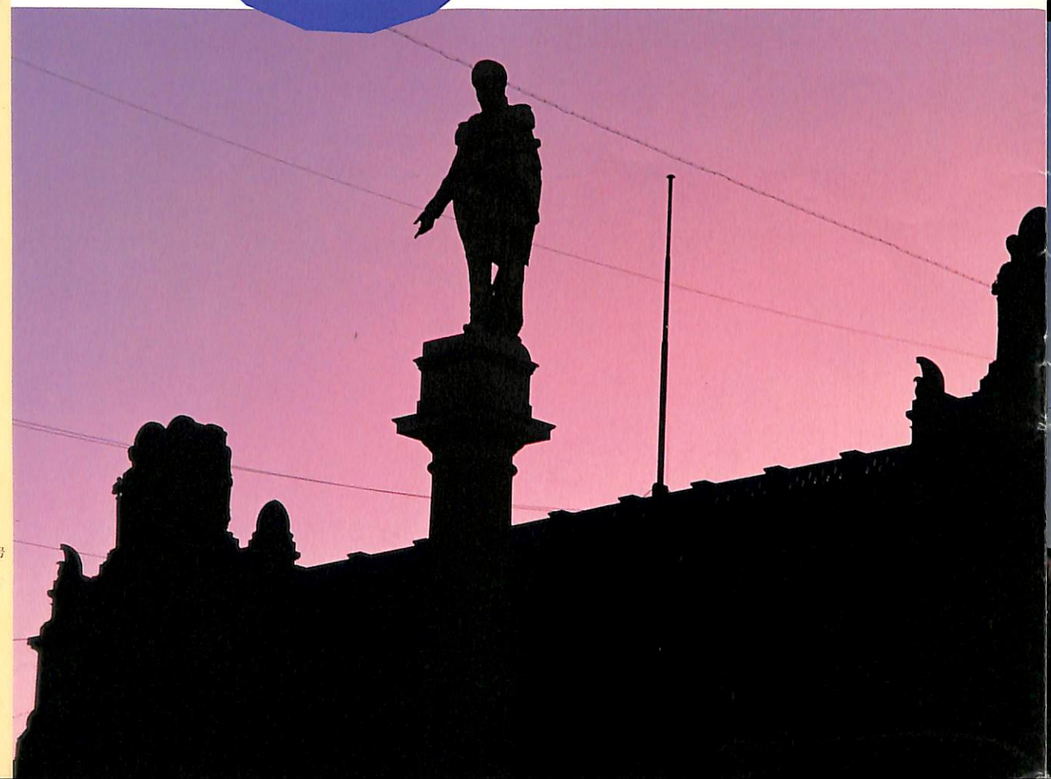


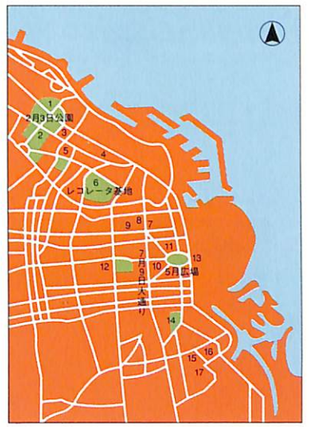
ブエノス・アイレス……秩序のなかの混沌

ブエノス・アイレスには世界に誇るものがいくつもある。
世界一広い幹新道路、世界一広い都市公園、
さらにはおそらく世界一豪華だと思われる墓地……。
ブエノス・アイレスは、いち早く都市文明を開始し都市文化を開花させた。
ここには、他のラテンアメリカにはない「都市の爛熟」のようなものがほの見える。
南半球に出現したヨーロッパ。今号はブエノスへと旅だった。

BUENOS AIRES

写真：伊奈英次　文：編集部





1.プラネタリウム
2.動物園
3.ホセ・エルナンデス美術館
4.国立美術館
5.国立装飾美術館
6.聖母ピラール聖堂
／ブエノス・アイレス市民センター
7.オベリスク
8.コロン劇場
9.最高裁判所
10.カビルド
11.メトロポリタン大聖堂
12.国会議事堂
13.大統領府
14.国立歴史博物館
15.カミニート
16.ボカ美術館
17.ローチャの曲がり角

上：ブエノス・アイレスの地下鉄
下、前頁共：日没風景、5月大通り、オベリスク

CONTENTS

1
APcom-REPORT
世界の建築文化を訪ねて⑨
ブエノス・アイレス／秩序のなかの混沌

13
ブエノス・アイレス・ミュージアム・ガイド
ブエノス・アイレスの
都市と建築を知るキーワード

15
APcom-AREA STUDY
販売店のあるまち⑨
山形・山形市　株式会社布施

19
APcom-FORUM
ARCHITECTURE VIEW UP
YKK R&Dセンター

23
取締役社長　吉田忠雄死去

25
INFORMATION
断熱コマーシャルフィルム
YKKグループ・オリジナルカレンダー
日経ニューオフィス賞
移動展示車"ビガ"

APcom-9、10月号 No.9
発行：YKKアーキテクチュラル
プロダクツ株式会社
〒130 東京都墨田区亀沢3丁目22番1号
YKK R&Dセンター
tel.03-5610-8166 fax.03-5610-8167
編集：APcom編集室
印刷：株式会社日刊スポーツ印刷社
発行日：1993年9月20日

制作協力：株式会社I&S
株式会社アルシーヴ社
AD：伊丹友広
デザイン・レイアウト：イットイズデザイン
表紙イラストレーション：冨沢天

ラテンアメリカの中ではブラジルに次ぐ広さをもつアルゼンチン。総人口は3.200万人。そのうちの1.200万人近くがブエノス・アイレスに住む。中心の人口密度は東京並みで、メキシコシティーやサンパウロと同様ラテンアメリカ特有の凄まじい都市への人口集中ぶりを示している。

しかし、他のラテンアメリカの都市では必ずと言っていいほど見かけるコロニアル風の建築やスパニッシュ風のバロック建築を、ブエノス・アイレスで見ることは少ない。

エサイヤ国際空港からブエノス・アイレス市内までの1時間足らずの道のりでまず目に飛び込んできたものは、サンフランシスコの郊外を思わせるようなプール付きの広い庭をもった戸建て住宅であった。また市内に入ってからはいわゆる鉄筋コンクリート製や石づくりの高層ビルが目についた。東京で見かけるようなカーテンウォールの高層ビルこそほとんどないが、メキシコやブラジルで散見した建物の感じとは雰囲気が異なることは確かだ。市内の中心部に入ってさらに驚いた。そこに展開する町並みは、まさしくヨーロッパのものだからである。

ブエノス・アイレスが来訪者にヨーロッパの雰囲気を抱かせるもう一つの要因は、その人種構成にある。アルゼンチンの人口のうち、97%ちかくがヨーロッパからの移住民の子孫である。アルゼンチンはイタリア、イギリス、フランス、ドイツなどからの移民たちによって形成された国なのだ。ラテンアメリカ諸国の中で白人たちが例外的に多いことが、都市づくりをはじめとしてさまざまな面でアルゼンチンを他のラテンアメリカ諸国と違うことを際立たせている。気候風土は異なっていても、故郷をヨーロッパにもつ子孫たちの共通の思いが都市景観に強く反映しているのであろう。ブエノス・アイレスの都市の骨格が形成されたのは19世紀末から20世紀の初頭にかけてである。当時パリはベルエポックの時代を迎えて沸きたっていた。ブエノス・アイレスがいかにパリを意識していたかは、ここに紹介するコロン劇場がなによりも雄弁に語ってくれるはずだ。コロン劇場こそアルゼンチンのヨーロッパ主義の象徴的存在だからである。

コロン劇場は、ミラノのスカラ座、パリのオペラ座と並ぶ世界3大劇場の一つである。ビクトリア・メアノ設計によるイタリア・ルネサンス様式。ちょうどパリのベルエポックと重なる1908年に完成。劇場内は4.500人の収容力をもつ。700個の電灯で飾られたシャンデリア、明かりとりのために付けられた華やかなステンドグラス、贅沢の限りをつくした装飾の数々……。

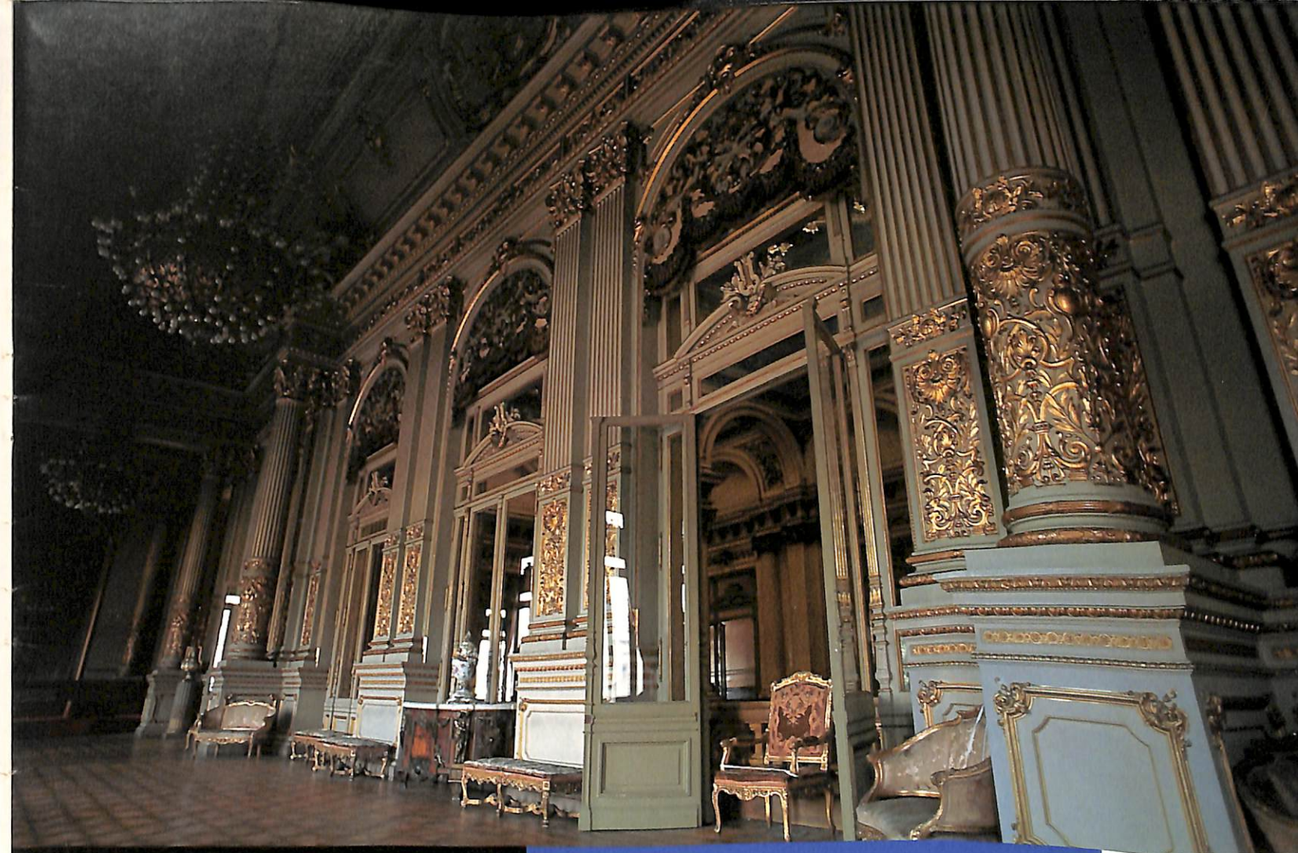
「南米のパリ」と称されるブエノス・アイレス。そこには間違いなくヨーロッパの香りが漂っている。

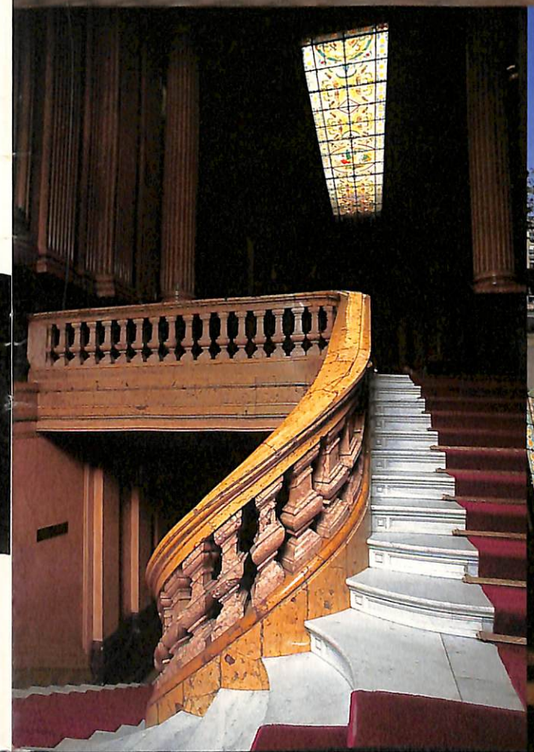
Colon Theatre

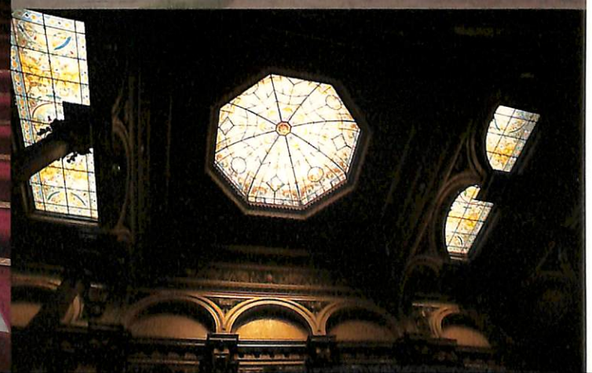
南米にパリを！

ラテンアメリカの都市につきもののコロニアル風な建物をブエノス・アイレスに探しだすことは難しい。代わりに軒を連ねるのは、石づくりの古風な建築や高級なアパート。それも世紀末から20世紀初頭にかけて都市が最も美しく輝やいていた時代の建物たち。ヨーロッパの移民たちによってつくられたブエノス・アイレス。それは彼らの記憶の再生なのだ。

上：ブエノス・バロックとでも名付けたい。エントランス部分から見上げる
下左：外観
下中：1階天井
下右：1階床の装飾
この頁すべてパローロ・ビル







上：黄金のオーナメントは気品のあらわれ
左、右下共：ステンドグラスによる光の装飾空間
右中：ファサード。夜はライトアップされる
この頁すべてコロン劇場

ブエノス・アイレスはきわめて整然とした都市だ。中心部は五月広場を起点にしてグリッド状に大通りと街路がつくられ、おおざっぱながら機能別のゾーニングが行われている。ランドマークになるモニュメントも多く、はじめて訪れた人間でも地図さえあれば見当がつく。ブエノス・アイレスがなぜ分かりやすい都市なのか。そのわけは、誕生期からはっきりとした目的をもってつくられた計画都市だからだ。

ブエノス・アイレスはアルゼンチンの中央部、すなわちブエノス・アイレスの西側に広がる草原地帯(パンパ)で生産された牧畜農産物をヨーロッパへ輸出するための出入り口として開発された。いわばアルゼンチンの経済発展の拠点として発展した都市なのである。すでに19世紀末には大方の都市基盤整備を終了していた。都市基盤整備としてつとに知られるオスマンのパリ改造計画が実施されたのは1860年代であるから、これはヨーロッパの都市史と比較してもひけをとらない早さだ。

まず輸送のための鉄道や市電が敷かれ、連邦の首都に定められた1880年以後は幹線道路の舗装、歩道の整備、上下水道の整備、ガス燈の設置、都市公園の建設を同時に進め、都市のインフラストラクチュアは今世紀を待たずに完成した。同時に都市景観を形成する建築物もこの時期に大きく変貌した。初期には植民地時代の面影を残すコロニアル風の建物も少なくなかったが、この時期にそのほとんどが取り壊された。そして、フランスやイタリアで当時見ることの多かったスタイルの建物にとって代わられたのである。つまり、ブエノス・アイレスは19世紀に大々的に行われた都市改造計画によって、それまでのコロニアル風建築に代表されるラテンアメリカ的な都市の顔を意図的に脱ぎ捨てたのであった。

たとえばここに紹介した大統領府はロココ、国会議事堂はグレコ・ローマン、最高裁判所はエクレクティシズム(折衷主義)、いずれも都市改造期に建てられたものだ。18世紀に建てられたカビルド、聖母ピラール聖堂とは鮮やかな対照を示している。

では現在のブエノス・アイレスの顔はどうだろうか。たとえば高級マション群。特徴的なバルコニーをもつこれらのビルは、むしろブエノス・アイレス的とでも呼ぶほかないような個性的な顔だちをしている。モダニズムのブエノス・アイレス・バージョンといったところか。パリを模倣したブエノス・アイレスは、都市にヨーロッパ的な洗練と秩序をもたらした。しかし、今日のブエノス・アイレスには明らかに秩序から逸脱しようというもう一つの別の力が働きはじめている。それはカオスの力だ。ブエノス・アイレスの魅力はこのカオティックな力が秩序と拮抗するように存在しているところにある。

Historical Architecture Modernism Architecture

クラシズムとモダンのアシンメトリー

ヨーロッパからの移民たちによって息を吹き返したブエノス・アイレスは、ラテンの情熱とヨーロッパの感性が同居しスパークする都市。秩序のなかにふつふつと沸き上がる混沌の泡。都市が必然的にもつ二面性を、ブエノス・アイレスは合わせ鏡のように映し出す。

上、上から2番目共：醜いエクレクティシズムの代表的作品と酷評された最高裁判所(1900年代初頭)
上から3番目左：白壁が美しいカビルド
(植民地的という理由でカビルドは同時期に解体されたという。修復後現在の姿になった。1725年)
上から3番目中：典型的ネオ・クラシズムのメトロポリタン大聖堂(1827年)
上から3番目右：グレコ・ローマン・スタイルの国会議事堂(1906年)
下左：スパニッシュ・コロニアル風の教会、
聖母ピラール聖堂(1732年)
下右：5月広場に面して建つ大統領府(1894年)

左、右、次頁下中共：パレルモ地区に建つ高級マンションやアール・デコ風のオフィス・ビル

誰でも思うことなのかもしれないが、カミニートの町並みはお世辞にもきれいとは言えない。写真で見てもわかるように、平然と洗濯ものが干され、ベランダには缶や瓶がおかまいなしに積み上げられている。第一その売り物のはずの壁にしても、ペンキははげ落ち、壁自体が今にも崩れそうなものさえある。

写真が正直に伝える通り、同じカラフルな壁面でもフンデルトヴァッサー・ハウスのような躍動感はないし、ましてやフランク・O.ゲーリーの自邸に見るようなヴァナキュラリズムを逆手に取ったような軽快さもない。カミニートの家々は当然のことながら、建築家の建てた家とは無縁な、その意味では普通のどこにでもあるヴァナキュラー建築の一つに過ぎないのである。

しかし、だからといってそれがカミニートの魅力を半減させるものではいささかもないことは言うまでもない。いやかえってその粗雑さ素人っぽさが、カミニートの魅力の重要な要素になっているとも言えるのだ。

ボカ地区はもともとイタリア移民の多い町である。独立後からヨーロッパ移民による人口の白人化傾向が進んだが、とくに1876年の移民法成立後はその傾向にいっそう拍車がかかった。ボカ地区にジェノバ人が流れ込んできたのもその時期である。

イタリア移民の多くは低所得層に留まり、その日暮らしを余儀なくされる者も少なくなかった。ボカ地区は日雇い労働者や船乗り、そうした男たちを商売にする娼婦たちがたむろする町であった。

アルゼンチン・タンゴの発祥はボカといわれているが、こうしたいわゆる場末の独特な雰囲気が激しさと哀愁が渦巻くタンゴを生んだのもなるほどうなづける。

荒廃と背中合わせだからこそそこに人間的な魅力を見いだした人々もいた。ボカで働き生活する人々を題材にした多くの作品を残したキンケーラ・マルティンもその一人だ。ボカで生まれ育ったマルティンは、絵の収入のほとんどをボカのためにささげ、病院や学校や美術館建造の資金にした。

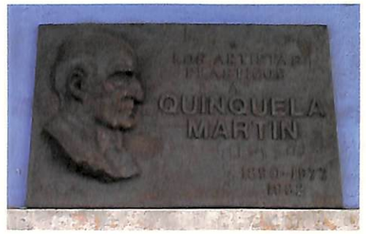
マルティンはこの地を「ボカ共和国」と名付け、イベントを催したりボカ活性化に努めた。ボカの100m足らずの小道を同じくボカ出身の詩人フィリベルトの名曲「カミニート」にちなんで路地公園にしようと発案し実施したのもマルティンである。

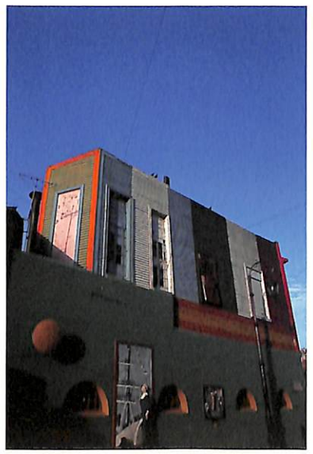
いかにも画家らしい発想であるが、その路地公園に面する建物の壁をさまざまな色に塗りわけてどこにもない町をつくろうというマルティンのアイディアは、場末の小さな港町を一躍世界に知らせることとなった。カミニートの家々の壁には、この町を愛する気持ちが滲み出ている。たとえ色がはげ落ちても美しさを失わない理由がそこにあるように思う。

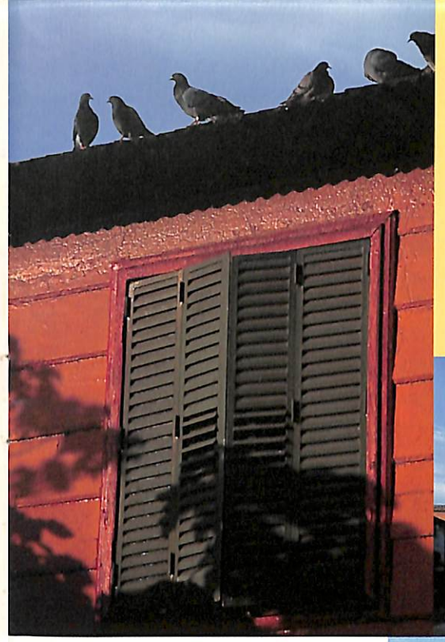
La Boca/Caminito

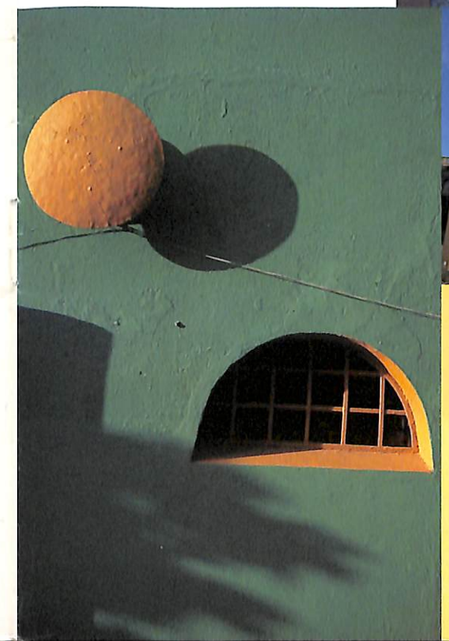
芸術家村「ボカ共和国」

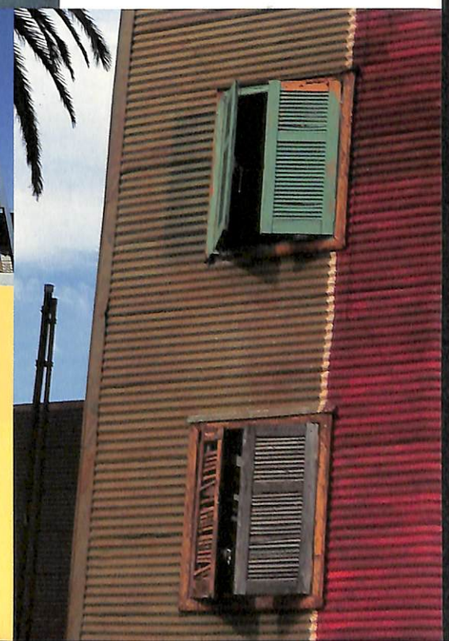
今ではすっかり有名になり観光客が押し寄せるボカ地区。なかでもカミニートは、その色とりどりにペイントされた建物の壁によって世界中に知られるようになった。荒廃する港町を甦らせたのは、ボカを愛してやまない一人の画家であった。タンゴの名曲「カミニート」の名を与えられた小径はこうして誕生した。











上左、上右、下右、前頁中共：個性溢れる開口部
上中、中左、中右、前頁右共：カミニートのさまざまな表情
中中：カミニートの町並み
下中：積み木のような表情が面白いボカ美術館ファサード
前頁左：キンケーラ・マルティンの碑

オランダの植民地であったニュー・アムステルダムを、あらたにイギリス人が占領することによって生まれた都市がニューヨークであることはよく知られている。ニューヨークに生活する人々が自らをニューヨーカーと呼ぶ心理の裏側には、だから過去を葬ることによって新らしく建設された都市に住む自負とてらいが見え隠れする。

ブエノス・アイレスとニューヨーク。この一見無関係に見える二つの大都市には、実は重要な共通項がある。もちろんどちらも港湾都市として発展してきたという都市史的な意味での共通性をもっている。しかし、ここで注目したいのはそこに生活する人間のもっと深いレベルでの共通性だ。

あまり知られていないことだがブエノス・アイレスは精神分析が大変に盛んな都市である。精神分析は、表面にあらわれる自己意識とは別に、その底に存在するもう一つの自己=無意識があると主張した。人間を一つのまとまった人格とは見なさず、一種の複合した人格(カオス)としてとらえようというのが精神分析の立場である。驚くべきことにブエノス・アイレスは、ニューヨークに次いで精神分析が盛んな場所なのだ。

精神分析はウィーン生まれのユダヤ人フロイトによってはじめられた。精神分析には、歴史のはじめから故郷をもたないユダヤ人のディアスポーラ(根無し草)としての屈折した意識が深く根を下ろしている。精神分析こそユダヤ人の心性そのものであると言えるのだ。

ニューヨークは世界でも稀なユダヤ人の多い都市である。そして実はブエノス・アイレスもまたニューヨークに次ぐユダヤ人の多い都市なのだ。最初に述べたとおりブエノス・アイレスは、イギリスやフランスなどのヨーロッパ移民によってつくられた都市であるが、その多くはユダヤの血をひく人々であった。

現代のブエノス・アイレスは、旅行者の目には秩序と混沌が同時に存在する不思議な都市に見えた。その理由は、たとえばユダヤ人に典型的な心理の複合性にあると言われれば確かにそうかもしれない、とも思う。

ただ、このある種の混乱こそが都市というものが長い間人々を魅了してきたものの一つであることだけは強調しておくべきであろう。

ここに紹介したレコレータ墓地はブエノス・アイレスの高所得者たちの住む地域に隣接している。150m四方に隣り合って建つ6.400あまりの墓は、ごらんのようなまさにヨーロッパ建築の歴史をそのまま陳列したような博物館である。

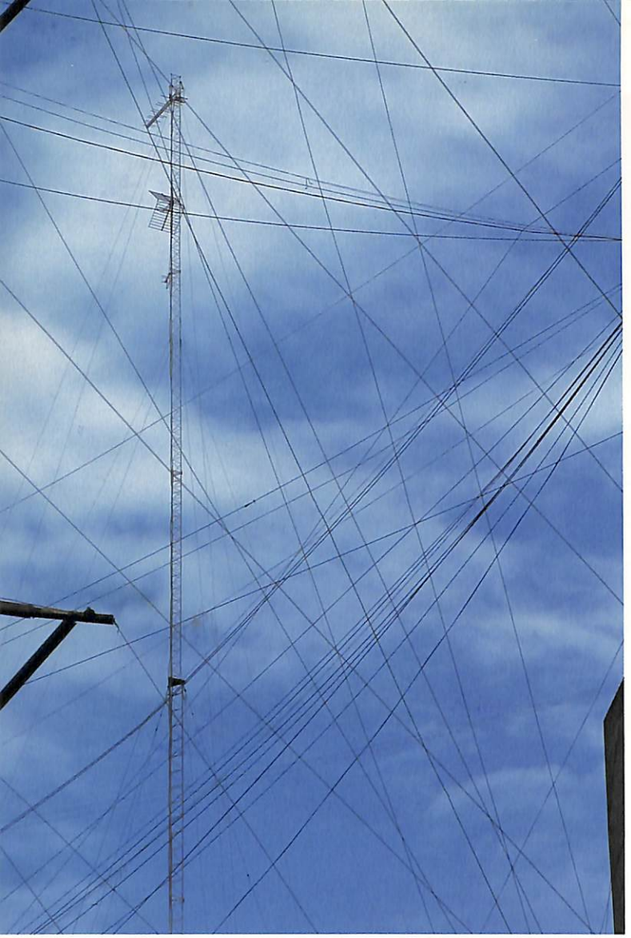
この世界で最も美学的といわれる墓を見てハッと思った。ここにあるのは、死してなおヨーロッパ社会を夢想し、それに同化しようとして喘ぐユダヤ人の強烈な思いそのものではないかと。

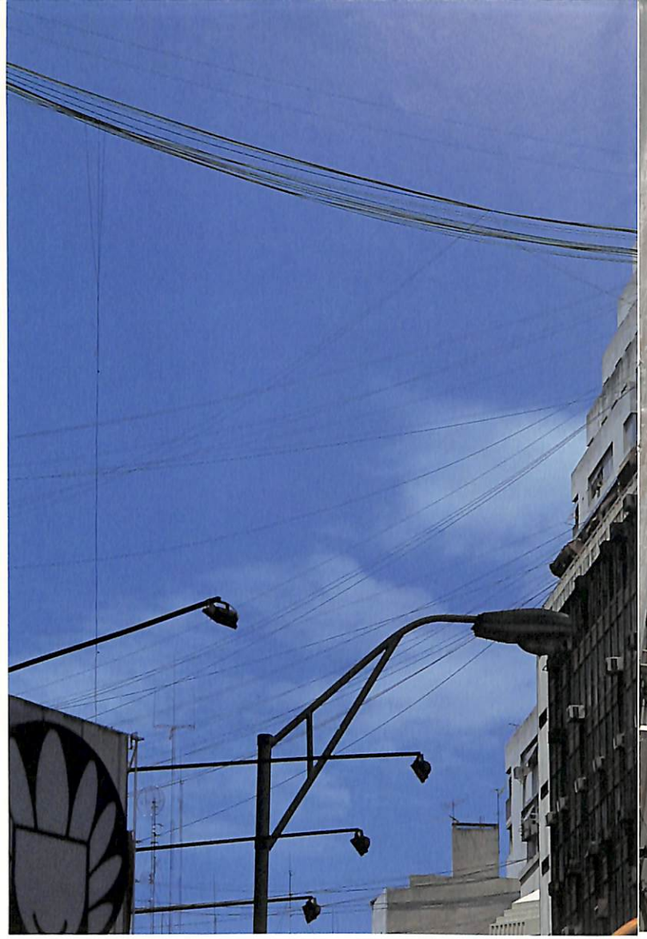
Recoleta's Cemetery

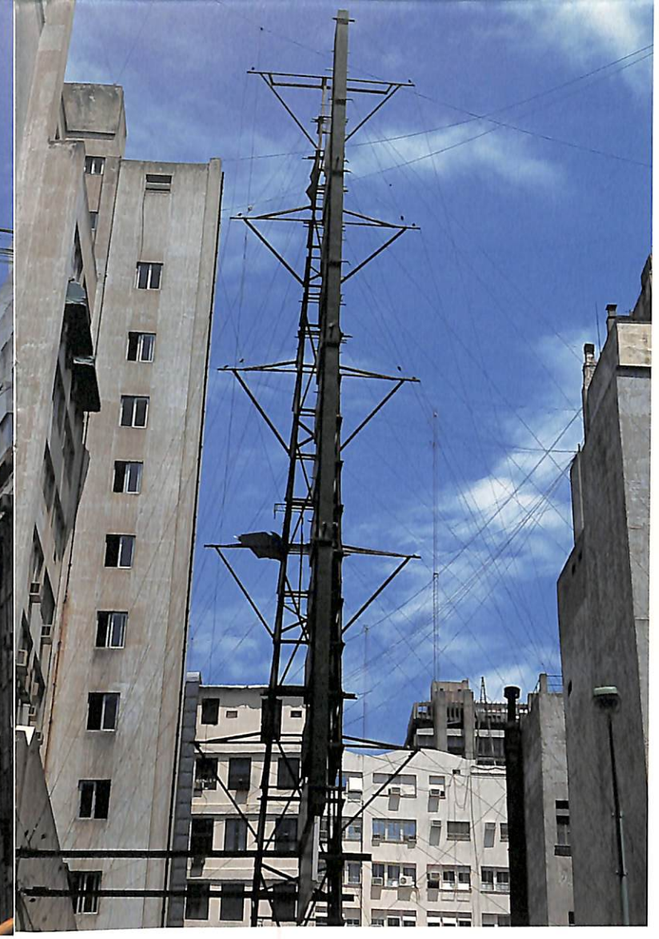
建築様式史である墓地

かつてエジプト人にとっては、住居は仮の宿で墓こそが永遠の棲家であったという。
ブエノス・アイレスの市民にとっての墓も、そうした永住のための棲家なのであろうか。
建築としての墓。死者たちの町……。
レコレータ墓地は、建築様式をミニチュア化した博物館のようである。

下右：さながら世界の建築のコレクションといったところ
下中：墓の扉のディテール
残り全て、前頁右共：グリークありグレコ・ローマンあり
アール・ヌーヴォーありモダニズムあり……
前頁左：ガラス越しに棺の見える墓もある







Chaos in Order

空には電線、地上には渋滞

クラシカルな石造建築が建ち並ぶ大通りやオシャレなブティックが軒を並べる街路。
しかしそうした整然とした町並みとは裏腹に、その上空には、
無数の電線が蜘蛛の巣のようにかかっている。そして路地という路地にはクルマや人間が溢れる。
秩序の中の無秩序。あえて混沌状態に堪えること。
都市の未来を知っているブエノス・アイレスっ子の暗黙の了解。

下左：どんな細い路地にもクルマが入ってくるのでたちまち渋滞する
残り全て、前頁2点共：縦横無人に渡された電線。
無性に懐かしい気持ちになるのはなぜだろうか

ブエノス・アイレス・ミュージアム・ガイド

○ボカ美術館
Museo Bellas Artes de La Boca

ローチャの曲がり角に面して建つ。画家キンケーラ・マルティンやボカに縁のある画家・彫刻家の作品500点あまりが常設展示されている。3階にはキンケーラの生前使用していた机やベッドなどが置かれている。

○国立装飾美術館
Museo Nacional de Arte Decorativo

リベルタドール大通りに面したネオ・クラシズムの優雅な建物。1911年ブエノス・アイレスの名家エラスリー家の邸宅として建てられたものを、美術館として利用している。1階にルイ16世時代の家具や調度品、2階に東洋の美術が展示されている。

入り口

○ホセ・エルナンデス美術館
Museo de Motivos Populares Argentinos José Harnándes

国立装飾博物館の4ブロック先にあるガウチョの博物館。ガウチョにまつわるものならばどんなものでも展示してある。ガウチョを描いた作家エルナンデスにちなんで建てられた。

入り口

○国立歴史博物館
Museo Histórico Nacional

レザーマ公園の一角を占める

1987年に開館した博物館。コロンブスのアメリカ大陸との出合いから、植民地時代を経て独立まで、1万5千点の資料が展示されている。

○ブエノス・アイレス市民文化センター
Centro Caltural

入り口

メキシコの絵画展のようす

聖母ビラール聖堂に隣接して建つ。市民に開放されていて常に色々な催しものが行われている。取材時には、メキシコの絵画展が開催されていた。

○国立美術館
Museo Nacional de Bellas Artes

入り口

レコレータ地区に位置し、フランス広場向かい、リベルタドール大通り沿いに面している。9.750㎡の広さを誇る館内には、内外の有名な作家たちの作品約1万点が展示されている。エル・グレコ、ゴヤ、モネ、ルノアール、モネ、ゴーギャン、ゴッホ、ピカソなどにまじって、藤田嗣治の「自画像」も収蔵されている。

絵画ばかりでなく、彫刻や家具、タピストリーなどの立体作品も豊富。

開館時間

○ボガ美術館
Museo Bellas Artes de La Boca
9:00〜18:00／土日曜 8:00〜12:00
月曜休館／1月休館

○国立装飾美術館
Museo Nacional de Arte Decorativo
15:00〜19:00
水曜休館／1月休館

○ホセ・エルナンデス美術館
Museo de Motivos Populares Argentinos José Harnándes
8:00〜19:00／土日 15:00〜19:00
1月休館

○国立歴史博物館
Museo Histórico Nacional
15:00〜19:00
水土曜休館／1月休館

○ブエノス・アイレス市民文化センター
Centro Caltural
催し物にあわせて変動する。

○国立美術館
Museo Nacional de Bellas Artes
9:00〜12:45　15:00〜18:45
月曜休館／1月休館

ブエノス・アイレスの都市と建築を知るキーワード

■地下鉄

古い車両だとカーブにさしかかると菱形に歪む

ブエノス・アイレスの鉄道の歴史は古い。すでに1857年にはイギリスの資本によって最初の鉄道が敷設され、それを追って市内に市電が敷設された。

地下鉄の開通は1913年で、ラテンアメリカ諸国では最も早い。現在でも当時を偲ばせる古い車両が使われている路線があり、レトロな雰囲気を漂わせている。

日本の技術者がブエノス・アイレスの地下鉄を視察し、最初の地下鉄銀座線の工事に生かされた事実は意外に知られていない。

■2月3日公園

土星のかたちをしたプラネタリウム

日系人が寄贈した日本庭園

都市公園としては世界最大の広さを誇る。パレルモ地区の大半を占めるため、一般にパレルモ公園と呼ばれている。もとは独立直後から独裁政治を敷いてきたファン・マニュエル・デ・ロサス大統領の私邸のあったところで、1874年に市営公園となった。ロサス大統領の独裁政権に終止符が打たれた2月3日を記念して2月3日公園と名付けられた。

公園内には人造湖や競馬場、日本庭園、プラネタリウムなどの施設があり、市民の憩いの場となっている。

2月3日公園内にある動物園。
世界の建築様式を取り入れた動物小屋

■7月9日大通り

ブエノス・アイレスは圧倒的にクルマ優先社会。
クルマが猛スピードで走り抜けていく

市内中心部を南北に3kmにわたって貫く大通り。中央分離帯が2カ所、それをはさんで16車線、道幅144mはもちろん世界一。中央分離帯の地下には駐車場が整備されている。

アルゼンチンがスペインから独立をした日を記念して7月9日大通りと名付けられた。

■ボカ

リアチュエロ川河口に栄えた港町ボカ。ブエノス・アイレス港の開ける前はアルゼンチンの唯一の表玄関であった。現在は往時の面影もなく、客船がときどき航行するくらいであるが、タンゴのライブ・ハウスやレストラン、土産物屋が集まっていて、観光名所として賑わっている。

ボカ美術館から見下ろしたリアチュエロ川河口